

日本遺産

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～

北前船が栄えた時代、直江津は「今町」と呼ばれ、高田藩の外港である今町の港には北前船が寄港しました。北前船が寄港したことによってさまざまな生業が生まれ、直江津のまちは大いににぎわいました。

詳しくは



波除神として信仰を集めた金刀比羅神社

金刀比羅神社は、文化10年（1813年）に創立し、海産物問屋などから波除神として信仰を集めました。境内には、海運に関わる人たちが奉納した石灯籠や石碑があり、備後国（現在の広島県）・尾道の石工が作った御影石製の石灯籠は、北前船によって運ばれました。また、境内には芭蕉句碑もあり、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅の途上で、直江津今町で詠んだ句が刻まれています。北前船が栄えた時代、直江津にさまざまな文化人が訪れたことが分かります。



金刀比羅神社（中央3）



石工
木田秀介作
備後尾道

直江津盛塩商會が奉納した石灯籠には、製作者である尾道の石工・木田秀介の名前が刻まれています。



松尾芭蕉句碑「文月や六日も常の世には似ず」

安寿姫と厨子王丸の供養塔

金刀比羅神社近くに、森鷗外の小説『山椒大夫』で知られる「安寿姫と厨子王丸の供養塔」が立ち並んでいます。『山椒大夫』は、子どもの安寿姫と厨子王丸が母らとともに陸奥国岩城（現在の福島県）から筑紫国（現在の福岡県）にいる父に会いに旅をする中で、不運にも直江津で人買いにだまされ、母は佐渡へ、安寿姫と厨子王丸は丹後（現在の京都府）へ売られ、離れ離れになってしまうという悲しい物語です。この物語は、室町時代の語りもの「さんせう太夫」を基に書かれているもので、古くから直江津が西や東の船が行き交う、東西の交流の起点であったことを伝えています。



安寿姫と厨子王丸の供養塔

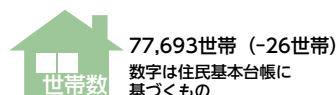
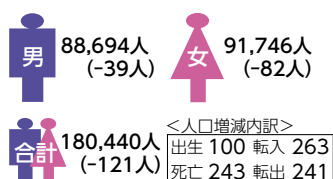
広報対話課から

☎025-526-5111

「広報上越3月号」は、2月20日㊥・21日㊤に各町内会へお届けし、各世帯にお配りします。届かない世帯の人は、広報対話課または、各総合事務所へご連絡ください。

上越市の人口・世帯数

令和7.1.1現在。（ ）は前月との比較



表紙のことは：上越市PR映像コンテスト

このコンテストには、普段はあまり動画を撮影しないという高校生も参加していました。25秒間の映像を完成させるまでには、企画から撮影、編集まで、考えることが盛りだくさんで、苦労したことたくさんあったと思います。皆さんも高校生たちの感情あふれる力作を、ぜひ当日会場でご覧ください。



見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。